

# 風流を楽しむ、 和風住宅ほど 優れた建築はない。



「知ってます? こういうのを『<田>の字』っていうんです」

家のあちこちにある古い土壁の、その補修の見積もりにやって来た年配の業者の人がそう言った。「和室が4つ、漢字の『田』みたいに配置されてるでしょ? それから、床の間のある奥の部屋からこっちの土間にかけて、8畳、6畳、4畳と並んだつくり、これは『八・六・四の三間流れ』ってね」

どうやらぼくのことを、たまたま古い日本家屋を買ったずぶの素人と思っただけだ。話のいちいちに「そうなんですか」と、さも感心したように相槌をうっていたのは、実際のところ感心していたのだ。

2015年の春、家を買った。築80年の、和の赴きたっぷりの日本家屋。もともと古い家が好きだったわけじゃない。たしかに古いモノにそそられることがないではないんだけど、こと家となると、『Casa BRUTUS』に出てくるような物件とまではいかなくても、新しく、せめて明るく清潔なのがいい。トイレだって、断然、ウォシュレット派なのだ。じゃあ、なぜにそんな家を買ったかという、ひとえに周囲の環境ゆえだった。町が近いわりに山の村落という風情で、さらには車で5分も行けば泳げる海もある。2歳と4歳の娘を育てる環境としても申し分なかった。自慢できる話じゃないが、物件を見たその日のうちに不動産屋さんに購入

の意志を伝えた。それから8カ月後、人生で初めて絵に描いたような和風住宅に住むことになった。

正直、冬は寒い。とくに朝方はしびれるようで、一度洗面所の蛇口の先からつららがぶら下がっているのを見たこともある。でも、冬というのは寒いものなのだ。最新の住環境では、通年、家の中を同じ気温に保つらしいが、快適ならずべてよしというのはいかがなものか。明治時代の文人・斎藤緑雨はこうおっしゃっている、「風流は寒きものなり」と。

冬以外の季節に関しては、強がることなく、いたって機能的だと言える。真夏、外の気温が35℃を超える猛暑日も、家のなかに入れば外の暑さが嘘のようにひんやり涼しい。陽の差し込みを避ける深い軒や、たっぷりの土を使った壁と屋根の構造が理想的な断熱をもたらしている、らしい。

機能の面では、和風住宅には日本人の知恵と技術が集積されている。しかし、ぼくは機能ではなく、家のあちこちで感じる日本人の細やかな感性が和風住宅の一番の魅力だと思っている。たとえば「雪見障子」。ただ雪を見ただけでは、障子を開ければすむ。でも、それを無粋として、障子の下半分に細工を施して窓を出現させる。なんという風流! この季節への鋭敏な感性は、「簾戸(すだれ)」という、すだれをはめこんだ障子戸にも見てとれる。葦を使っていることから「葦戸(よしど)」とも呼ばれるそれは夏用の障

子戸で、毎年梅雨の前後に入れ替える。実際、葦の細かな隙間から風が通るのだが、これが効用を発揮するのはむしろその外観だ。目で涼をとる、そんな感性の鋭さにはほとほと感嘆するしかない。

住宅同様、日本人が長年培った技術の集積と言えるのが畳である。世界中のどこを探しても、これだけ安全かつ気候や風土にぴったりマッチした床材はないんじゃないだろうか。同時に——これが畳のすごいところで面白いところ——畳は縁をとまなうことによって、畳の強度を増すだけでなく、雪見障子や簾戸と本質を同じくするものを、つまり、畳に風流という価値をもたらすのだ。

夏の午後、そんな畳の上でごろりと横になって、うぶ毛を撫でられているような、やわらかな風を感じながらまどろむ。日本の家もたらしてくれるこの至福の時間は、しかし、幼い娘がふたりもいてはひと夏に二度あるかないか。当の娘たちは風流を解するわけもなく、夏であろうが冬であろうが、<田>の字と八・六・四を走り回っている。とはいえ、彼女たちが畳の上を裸足で走る音も実は悪くない。我が家なりの風流と言っておこう。

## 赤星 豊

あかほし・ゆたか/ライター・編集者。2015年に岡山県浅口市に移る。日々の生活をつづった『鴨方町六条院回覧板』をウェブマガジン『コロカル』(マガジンハウス)にて連載中。